

## 西洋医学発祥の地・長崎から150年の時を越えて —現代の若きポンペ達—

株式会社 長崎経済研究所 調査研究部 主席研究員  
(本年6月24日より、株式会社十八銀行 地域振興部 業務役)

藤原 章

### ●長崎から始まった西洋医学

江戸時代の「出島」に象徴されるように、長崎が歴史的に唯一海外との窓口の役割を担ってきたことは周知の事実だが、150年前に当地で西洋医学が伝授され、日本で初めて患者に治療が施されたことは、意外に知られていない。

西洋医学は、安政4(1857)年にオランダ海軍軍医ポンペによってもたらされ、当時の「医師は自分自身のものではなく病める人のものである」というポンペの言葉は、一世紀以上の時を経て、現在もなお長崎大学医学部の教育理念として生き続けている。我が国の近代的医療は、まさに長崎から始まったのである。

この長崎で今、自宅療養を希望する終末期患者の在宅医療に積極的に取り組み、医療分野を越えさまざまな分野と連携・協働し、有機的なネットワークの構築に成功した開業医達がいる。

### ●“斜面都市”長崎ならではの医療デバインド

長崎市を訪れた多くの人が最初に驚くのは、すり鉢状に取り囲む山々にびっしりとへばりつくような家々の風景ではないだろうか。長崎市は、市民の多くが斜面に居住している都市である。同じように、終末期で自宅療養を望むたくさんの患者も、斜面地に住んでいる。患者にとって斜面地が通院を妨げ、医師にとっては往診を困難にする障害となっていることは否めない。

長崎市は、「人口比医師数全国一」(2006年)であるなど、医療供給面で恵まれてきたにもかかわらず、このように終末期患者の医療アクセスが事実上制限されることから、自宅療養・在宅

死は他県と比べてきわめて少なくなっている。

### ●最期まで患者と向き合う現代のポンペ達

そこで、在宅医療ネットワーク構築の必要性を感じた13名の開業医が立ち上がり、2003年3月、「長崎在宅Dr.ネット」を結成した。

「Dr.ネット」は、2名の担当医と症状に応じて協力する医療機関がチームを組んで一人の患者を支え、「地域ケア連携」を実践している。さらに歯科医、薬剤師、管理栄養士、保健師、訪問看護師、ケアマネージャーなど、医療以外の分野まで及ぶ体制が確立され、ネットワークの裾野は長崎市近隣自治体まで拡大してきた。

「Dr.ネット」の最大の特長は、長崎市そのものを一つの病院、また患者の自宅をその病室とみなして、患者と家族を「Dr.ネット」の中心に位置付け、患者の日常生活から看取りまで、途絶えることなく関係者全員で支え合い、協働する点にある。その結果、今では「Dr.ネット」の医師数は130名を超え、患者数も急増、特に在宅看取り数は着実に増えてきた。

最後に、もう一度ポンペの言葉に耳を傾けてみよう。この言葉に即すなら、医師は担当の患者が終末期を迎えた時、患者とともに一時的にせよ、死生観を共有することが求められるだろう。ポンペが語った真意が、今日の「Dr.ネット」の取組みに具現化されているように思える。

こうしている間も「Dr.ネット」の医師達は患者のもとへ向かう。地道な努力であるが、時を越え、ポンペの言葉を実践している現代のポンペ達の活躍に期待したい。